

混合研究法による舞楽鑑賞の日独文化比較

A Cross-Cultural Comparison of Bugaku Appreciation Between Japan and Germany: A Mixed Methods Study

檀割 仁平[†], ヴァイラー セリーナ[‡], マノリカ マリア[†], ヤコブセン トマス[†]
Jimpei Hitsuwari, Selina M. Weiler, Maria Manolika, Thomas Jacobsen

[†]ヘルムートシュミット大学, [‡]日本学術振興会
Helmut Schmidt University, Japan Society for the Promotion of Science
hitsuwari@hsu-hh.de

概要

本研究は、日本の伝統宮廷舞踊である舞楽の美的鑑賞における文化差を検証した初の実証研究である。質的・量的手法を用いて日本人とドイツ人参加者を比較した結果、日本人は選好、超越的体験、優美さ、調和と構造において一貫して高い評価を示した。この文化差は、日本の美的概念「間」と、東アジアの全体的認知処理対西洋の分析的認知処理の違いで説明される。文化特有の認知スキーマが複雑な美的刺激の受容を形成することが明らかになった。

キーワード: 舞楽 (bugaku), 雅楽 (gagaku), 舞踊 (dance), 美的鑑賞 (aesthetic appreciation)

舞楽は精巧で色彩豊かな衣装と面を着用し、神話的・歴史的物語を表現する高度に様式化された象徴的動きが特徴である。西洋の伝統舞踊が垂直運動と軽やかさを重視するのに対し、舞楽は膝を曲げた制御された歩みで大地との強いつながりを保つ。舞楽の鑑賞に関する実験的研究はこれまで行われていないが、日本の伝統芸能に関する研究では、専門家と初心者で印象評価の因子構造が異なることが示されている (田中・伊丸岡, 2021)。

1. はじめに

1.1. 舞踊の経験美学と文化差

経験美学は、芸術認知と美的処理を実証的手法で検証する分野として過去 20 年間で大きく発展している (Frascaroli et al., 2024; Jacobsen, 2006)。視覚芸術や音楽に加え、舞踊研究が最も動的に拡大している領域の一つとなっている (Christensen & Calvo-Merino, 2013; Cross, 2025)。

舞踊は文化の歴史的、宗教的、社会的慣習を反映する文化表現である (Liu et al., 2024)。文化差による美的処理の違いは、美的処理に影響する認知スキーマの違いとして理論化されている (Jacobsen & Beudt, 2017)。Darda and Cross (2022) の研究では、西洋人は西洋舞踊を、インド人はインド舞踊を好むという文化差 (内集団バイアス) が示されている。

1.2. 雅楽と舞楽

本研究は、千年以上保存されてきた日本の伝統宮廷舞踊である舞楽に焦点を当てる。舞楽は雅楽の一部として演じられ、7-9 世紀に中国・朝鮮の音楽的伝統の影響下で発展した (Sakata & Kurasaka, 2011)。2009 年にユネスコ無形文化遺産に登録され、現在も宮廷儀式や神社、寺院で演じられている (Rambelli, 2022)。

1.3. 雅楽と舞楽

日本の古典音楽では、数学的規則性ではなく、フレーズや意味に応じて時間間隔が伸縮する「間」という概念が含まれる (Daikoku & Yumoto, 2020)。舞楽では間が特に顕著な特徴で、単一の動きが西洋舞踊より遥かに長い時間を占める場合がある (Malm, 1983)。間の適切な使用は舞踊表現を豊かにし、より深い感情的・身体的共鳴を育む (Tseng et al., 2021)。日本人は環境における独特な間を持つ音楽・芸能への蓄積された接触により、これらの要素を異なって処理する可能性がある (Jacobsen & Beudt, 2017)。

認知における文化差研究では、西洋の分析的処理と東洋の全体的処理の傾向が指摘されている (Nisbett et al., 2001)。例えば、東アジアと西洋の肖像画のデジタルアーカイブ比較では、東アジア作品は小さな顔とより豊かな背景文脈を描き、日本人参加者は豊かな背景を持つ芸術を好む一方、アメリカ人参加者は最小限の背景を好むことが示された (Masuda et al., 2008)。舞踊関連研究では、Monroy et al. (2022) が日本人とイギリス人参加者のグループダンスの美的評価を比較し、イギリス人参加者は非同期ダンスを好む傾向があるのに対し、日本人参加者は両方を等しく評価することを示した。これらの知見は、日本人観察者がより全体的な知覚アプローチを採用し、同期された振付の全体的な流れとゲシュタルトに注意を向ける可能性を示唆している。

1.4. 研究目的と仮説

本研究は混合手法アプローチにより、日本人とドイツ人参加者が舞楽をどのように知覚・経験するかを検証することを目的とした。

研究 1 では、ドイツで雅楽・舞楽を演じるドイツ人への自由回答調査 (1-A) と、ドイツでこれらの芸術形式を教授・普及してきた日本人指導者へのインタビュー (1-B) を実施した。

研究 2 では、研究 1 の質的知見に基づき、日本人とドイツ人参加者が舞楽公演をどのように知覚・評価するかを検証した。仮説 1 (文化差と美的鑑賞) では、H1a: 日本人は日本の音楽・舞踊動作への豊富な接触による流暢な処理のため、ドイツ人より高い美的評価を示す、または H1b: ドイツ人は限定的な事前接触による新奇性効果のため、日本人より高い美的評価を示すと予想した。仮説 2 (動作・音楽関係の知覚差) では、日本人は動作・音楽関係とリズムの不規則性をより理解・受容し、ドイツ人はこれらをより不協和で混乱するものと知覚すると予想した。仮説 3 (個人特性の調整効果) では、文化的背景と美的鑑賞の関係は、ダンスの専門性、美的感受性、経験への開放性などの個人特性により調整されると予想した。

2. 研究 1

2.1. 研究 1-A

ドイツ人の雅楽・舞楽実践者 7 名からの質問紙回答を収集した。参加者は西洋的なダンスと比較して、舞楽を「ゆっくりとした」「流れるような」「地に足のついた」ものとして描写した。彼らは舞楽を見るときに畏敬の念や崇高さを経験したと報告し、その超越的な特質を強調した。これはその宗教的・儀式的な起源と関連している可能性がある。多くの参加者は動きの精密さや綿密さに注目し、バレエのような西洋的ダンスがジャンプの動きで「空中を浮遊する」ことを強調するのに対し、舞楽は曲げた膝と制御された計測された歩みによって地面との強いつながりを維持していると観察した。

2.2. 研究 1-B

研究 1-B では、40 年以上の経験を持ち、24 年間ドイツで教えている日本人舞楽指導者への半構造化インタビューを実施した。この指導者は知覚の文化的違いを

強調し、ドイツ人が最初に舞楽を理解するのが難しいと感じたのは、日本の美的概念「間 (ま)」に具現化されているリズムの不整合性や曖昧さのためだと指摘した。この概念は単なる空間や時間の物理的な隙間ではなく、その空間内の緊張感、沈黙、期待感を含んでいる。

3. 研究 2

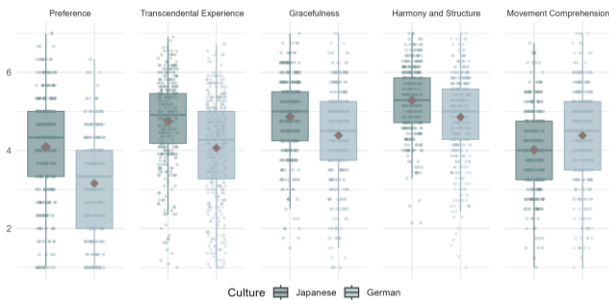
3.1. 参加者と手続き

日本人参加者 392 名 ($M_{age} = 44.16$) とドイツ人参加者 409 名 ($M_{age} = 33.14$) が、プロフェッショナルの雅楽団体「下熊健」による舞楽「胡飲酒」の 7 分 43 秒の映像を視聴後、39 項目の 7 段階リッカート尺度で舞楽を評価した。39 項目は、ダンスの先行研究 (Christensen et al., 2016; Darda & Cross, 2022) と研究 1 を参考にして作られた。個人特性として、ゴールドスミスダンス洗練度指標 (Rose et al., 2022)、美的体験欲求尺度 (Lundy et al., 2010)、曖昧さに対する態度尺度 (Lauriola et al., 2016)、開放性 (Rammstedt et al., 2024)、舞楽への親しみ、日本文化接触度を測定した。

3.2. 結果 1: 因子分析と文化差

39 項目の因子分析により、両文化で 5 因子構造が抽出された: 選好、超越的体験、優美さ、動きの理解、調和と構造。文化差の比較では、日本人参加者はドイツ人参加者より選好 ($t(799) = 10.31, p < .001, d = .73$), 超越的体験 ($t(799) = 8.29, p < .001, d = .58$), 優美さ ($t(799) = 6.14, p < .001, d = .43$), 調和と構造 ($t(799) = 6.46, p < .001, d = .45$) で有意に高いスコアを示した。一方、ドイツ人参加者は動きの理解 ($t(799) = -4.80, p < .001, d = -.34$) で有意に高いスコアを示した。

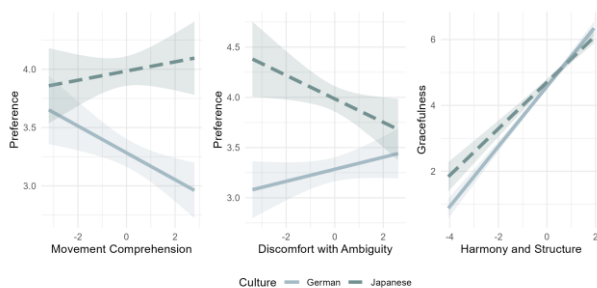
図 1 美的評価の文化差



3.3. 結果 2: 個人特性の調整効果

階層的重回帰分析により、文化の主効果に加えて有意な交互作用が確認された。選好では、文化と動きの理解の交互作用 ($b = 0.15, p = .016$) および文化と曖昧さへの不快感の交互作用 ($b = -0.18, p = .008$) が有意であった。具体的には、ドイツ人では動きの理解が高いほど選好が低下したが、日本人では関連がなかった。また、日本人では曖昧さへの不快感が選好を負に予測したが、ドイツ人では関連がなかった。優美さでは、文化と調和と構造の交互作用 ($b = -0.20, p = .001$) が有意で、両文化で調和・構造が優美さを正に予測したが、この効果はドイツ人により強かった。

図2 文化と個人特性の評価に与える影響の交互作用



4. 総合考察

4.1. 舞楽の経験美学

本研究は、千年以上の歴史を持つ日本の伝統宮廷舞踊である舞楽の美的鑑賞に関する初の実証的研究である。質的・量的手法を組み合わせた混合研究法により、舞楽が観者に強い感情的・美的反応を引き起こすことが示された (Christensen & Calvo-Merino, 2013)。研究1でドイツ人参加者が報告した「畏敬の念」や「崇高」といった感情反応は、研究2の因子分析で「超越的体験」として特定され、舞楽の宗教的・儀式的起源と関連している (Rambelli, 2022)。

4.2. 美的処理における文化差

本研究の重要な知見は、日本人とドイツ人参加者間の舞楽美的鑑賞における体系的違いである。日本人参加者は選好、超越的体験、優美さ、調和と構造において一貫して高い評価を示した。「間」の概念が日独差を説明する中心的要素として浮上した。間は単なる空間・時

間の隙間ではなく、その空間・時間内の緊張感、沈黙、期待感を含む (Daikoku & Yumoto, 2020; Tseng et al., 2021)。研究2では、日本人参加者は調和と構造が低い場合でも相対的に高い優美さ評価を維持しており、日本人観者が不規則なリズムや予測不可能性を美的体験の一部として受容・統合する文化的枠組みを持つことが示唆された。

これらの文化差は、東アジアの全体的認知処理と西洋の分析的認知処理という理論的枠組みでも解釈できる (Masuda et al., 2008; Nisbett et al., 2001)。興味深いことに、ドイツ人参加者は日本人参加者よりも舞楽の動きに対する理解度が高いと報告した。これは個々の要素と動きに焦点を当てる西洋の分析的傾向を反映している可能性がある。対照的に、日本人参加者は特定の動きを分析的に分離するよりも、公演全体の流れと雰囲気注意到注意を向ける全体的視点を採用している可能性がある。

文化と動きの理解の有意な交互作用は、この認知処理差の解釈を支持している。ドイツ人参加者では、動きの理解が高いほど選好が低下したが、日本人参加者ではそのような関係は存在しなかった。この知見は、理解が必ずしも楽しみを高めるわけではないことを示唆し、舞踊における再現可能性と楽しみの負の相関を強調した先行研究 (Orlandi et al., 2020; Lee et al., 2025) とも一致している。

これらの文化差は、Jacobsen and Beudt (2017) が提案した美的体験に影響する認知スキーマの違いとしても理解できる。舞楽鑑賞の文脈では、このような評価は文化特有のスキーマによって形成され、文化集団間で異なる認知処理と感情のパターンをもたらす可能性がある。

4.3. 限界と今後の研究

本研究にはいくつかの限界がある。第一に、単一の舞楽公演に焦点を当てており、舞楽は激しい動きを含むソロ舞踊 (陵王) から最小限の動きのグループ舞踊 (賀殿急) まで多様なレパートリーを含む。第二に、映像記録を使用しており、生の公演では異なる反応が生じる可能性がある (Jola & Grosbras, 2013)。今後の研究では、複数の舞楽形式や生の公演での検討に加え、異文化間で観者が注目する要素の違いを直接的に検証する手法の導入が必要である。

5. 結論

本研究は、日本人とドイツ人観者が伝統的な日本宮廷舞踊をどのように知覚・評価・感情的に反応するかの有意な違いを明らかにした。日本人の高い美的評価は文化特有のスキーマと全体的処理スタイルの影響を反映し、時間的弾力性と生産的曖昧性を受容する日本の美的概念「間」が特に重要な要因として浮上した。本研究の知見は、文化的背景が複雑な美的刺激の受容をどのように形成するかの理論的理解を深めることで、経験美学分野の発展に貢献している。

文献

- Christensen, J. F., & Calvo-Merino, B. (2013). Dance as a subject for empirical aesthetics. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*, 7(1), 76–88. <https://doi.org/10.1037/a0031827>
- Cross, E. S. (2025). The neuroscience of dance takes center stage. *Neuron*, 113(6), 808–813. <https://doi.org/10.1016/j.neuron.2025.01.016>
- Darda, K. M., & Cross, E. S. (2022). The role of expertise and culture in visual art appreciation. *Scientific Reports*, 12(1), 10666. <https://doi.org/10.1038/s41598-022-14128-7>
- Daikoku, T., & Yumoto, M. (2020). Musical expertise facilitates statistical learning of rhythm and the perceptive uncertainty: A cross-cultural study. *Neuropsychologia*, 146, 107553. <https://doi.org/10.1016/j.neuropsychologia.2020.107553>
- Frascaroli, J., Leder, H., Brattico, E., & Van de Cruys, S. (2024). Aesthetics and predictive processing: Grounds and prospects of a fruitful encounter. *Philosophical Transactions of the Royal Society B*, 379(1895), 20220410. <https://doi.org/10.1098/rstb.2022.0410>
- Jacobsen, T. (2006). Bridging the arts and sciences: A framework for the psychology of aesthetics. *Leonardo*, 39(2), 155–162. <https://doi.org/10.1162/leon.2006.39.2.155>
- Jacobsen, T., & Beudt, S. (2017). Stability and variability in aesthetic experience: A review. *Frontiers in Psychology*, 8, 143. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2017.00143>
- Lauriola, M., Foschi, R., Mosca, O., & Weller, J. (2016). Attitude toward ambiguity: Empirically robust factors in self-report personality scales. *Assessment*, 23(3), 353–373. <https://doi.org/10.1177/1073191115577188>
- Lee, H., Ashwell, C., Sperling, M., Rai, L., & Orgs, G. (2025). Engaged and confused: Aesthetic appreciation of live and screened contemporary dance. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1037/aca0000727>
- Liu, W., Xue, H., & Wang, Z. Y. (2024). A systematic comparison of intercultural and indigenous cultural dance education from a global perspective (2010–2024). *Frontiers in Psychology*, 15, 1493457. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2024.1493457>
- Lundy, D. E., Schenkel, M. B., Akrie, T. N., & Walker, A. M. (2010). How important is beauty to you? The development of the Desire for Aesthetics Scale. *Empirical Studies of the Arts*, 28(1), 73–92. <https://doi.org/10.2190/EM.28.1.e>
- Malm, J. R. (1983). The world of Japanese classical dance. *The World of Music*, 25(1), 70–79. <https://www.jstor.org/stable/43560878>
- Masuda, T., Gonzalez, R., Kwan, L., & Nisbett, R. E. (2008). Culture and aesthetic preference: Comparing the attention to context of East Asians and Americans. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34(9), 1260–1275. <https://doi.org/10.1177/0146167208320555>
- Monroy, E., Imada, T., Sagiv, N., & Orgs, G. (2022). Dance across cultures: Joint action aesthetics in Japan and the UK. *Empirical Studies of the Arts*, 40(2), 209–227. <https://doi.org/10.1177/02762374211001800>
- Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001). Culture and systems of thought: Holistic versus analytic cognition. *Psychological Review*, 108(2), 291–310. <https://doi.org/10.1037/0033-295X.108.2.291>
- Orlandi, A., Cross, E. S., & Orgs, G. (2020). Timing is everything: Dance aesthetics depend on the complexity of movement kinematics. *Cognition*, 205, 104446. <https://doi.org/10.1016/j.cognition.2020.104446>
- Rambelli, F. (2022). Gagaku in medieval Japanese religion. *Religions*, 13(7), 582. <https://doi.org/10.3390/rel13070582>
- Rammstedt, B., Roemer, L., Lechner, C. M., & Soto, C. J. (2024). Adapting the BFI-2 around the world—Coordinated translation and validation in five languages and cultural contexts. *European Journal of Psychological Assessment*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1027/1015-5759/a000844>
- Rose, D., Müllensiefen, D., Lovatt, P., & Orgs, G. (2022). The Goldsmiths Dance Sophistication Index (Gold-DSI): A psychometric tool to assess individual differences in dance experience. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*, 16(4), 733–745. <https://doi.org/10.1037/aca0000340>
- Sakata, M., & Kurasaka, S. (2011). Basic study in ma timing in Gagaku: Between the dancer and the ryuteki player in Bugaku dance “Ryo-Ou.” *2011 Second International Conference on Culture and Computing*, 2, 185–186. <https://doi.org/10.1109/Culture-Computing.2011.57>
- 田中 祐貴・伊丸岡 俊秀 (2021). 専門性の有無が日本舞踊の評価構造に与える影響. 日本認知科学会第38回大会発表論文集, 38, 771–776.
- Tseng, C., Cheng, M., Matout, H., Fujita, K., Kitamura, Y., Shioiri, S., Ho, I. L. & Bachrach, A. (2021). MA and togetherness (Ittaikan) in the narratives of dancers and spectators: Sharing an uncertain space. *Japanese Psychological Research*, 63(4), 421–433. <https://doi.org/10.1111/jpr.12330>